

牛車

三遊亭円朝

青空文庫

このたび 此度 英照皇太后陛下の御大喪に就きましては、日本国中の人民は何社でも、総代として一名づつ、御拝観の爲めに京都へ出す事に相成りました。処で数なりませんが、落語家社会でも、三遊社の頭取円生と円遊の申しまするには、仮令落語家社会でも、何うか総代として一名は京都へ上せまして、御車を拝ませたいものでござりますが、扱どうも困る事には、是まで十五日間の謹みで長休みをいたして居りました処へ、御停止あけとなつて、又休んで京都まで参らうといふものは一人もありませんで、誠に困りましたが、幸師匠はマア寄席へもお出なさいませぬ閑人です。いらつしやる事でげすから、御苦労ながら三遊社の総代として、貴方京都へ行つて下さる訳には参りませんか、円朝が頼まれました。元より此度の御大喪は、是迄にない事でございませぬから、何うかして拝見したいと存じて居りました処へ、円生と円遊に頼まれました事故、腹の中では其実僥倖で、そんならば私が皆なの総代として京都へ往きませうと受合ひました。

夫から徐々京都へ参る支度をして居ります中に、新聞で見ましても、人の噂を聞きまして、西京の旅籠屋は客が山を為して、ミツシリ爪も立たないほどだといふ事で

ごごいますから、此奴は迂かり京都まで往つて、萬一宿がないと困ると思ひまして、
 京都の三条白河橋に懇意な者がごごいますから、其人の処へ郵便を出して、私が参
 るから何うか泊めて下さいと申して遣りますと、其返事が参りました。「拝啓益
 々御壯健奉慶賀候、随つて貴君御来京の趣に御座候得共、実は御存じの
 通り御大喪にて、当地は普通の家にてても参列者のために塞がり、弊屋も宿所
 充てられ、殊に夜のもの等も之れなく、甚だ困り居り候折からゆゑ、誠に残念には御
 座候得共、右様の次第に付き悪からず御推察なし被下度候、匆々」といふ
 返事が参りました。私も少し驚きまして、此分では迎も往く事は出来まいと困りました
 から、私が日頃御鼻肩に預かりまする貴頭のお方の処へ参りまして、右のお話をいたしま
 すると、そんならば幸私も往くから、連れて往つて遣ると仰しやいました。誠に有難い
 事で、私もホツと息を吐いて、それから二日の一番汽車で京都へ御随行をいたして木
 屋町の吉富楼といふ家へ参りました、先方では貴頭のお客様ですから丁寧の
 取扱ひでございましてお上の方はお二階或は奥座敷といふので私は次の室のお荷物
 の中の少々ばかりの明地へ寐かして頂く事に相なりました。
 扱六日には泉山といふ処へお出掛けになるに就て、私もお供をいたし四条通りから

いふ、大層六づかしい町名でございまして、里見忠三郎といふ此頃新築をした立派な家で、此処は御案内の通り古器物骨董書画類を商ふ方で中々面白い人でございませぬ。何うも諸方から頼まれたと見えまして、大分に宜いお客様もございませぬ。西京大坂の芸妓も参つて居りましたが、皆丸鬘で黒縮緬の羽織へ一寸黒紗の切れを縫ひつけて居りまして、其の様子は奥様然とした袴へで、皆其処に寄り集まつてお通りの時刻を待つて居りますので、其の中に五もく鯨が出たり種々御馳走が出来ます中にチヨンくと拍子木を打つて参りました。何だらうと思つて直に飛出して格子を明けて見ますると、両側共に黒木綿の金巾の二巾位もありませうか幕張りがいたしてございまして、真黒で丸で芝居の怪談のやうでございませぬ。処へ大きな丈三尺もある白張の提灯が吊さがつて居ります、其提灯の割には蠟燭が細うございませぬからボンヤリして、何うも薄気味の悪いくらゐる何か陰々として居ります。軒下には縄張りがいたしてございませぬ此の中に拝観人は皆立て拝みますので、京都は東京と違つて人氣は誠に穏やかでございまして、巡查のいふ事を能く守り、中々縄の外へは出ません。一尺ぐらゐる跡に退つて待つて居る様子、それが東京の人だと「何をしやアがる、押しやアがるな、モツと其方へ寄りやアがれ。なんかと突倒して、

繩なはから外へ飛出とびだし巡査しゆんさに摘つまみ込まれる位くらゐの事がございませうが、西京さいきやうは誠に優やさしい、
 「押おしなはんな、アの様やうな事いうてや、押おしなはんな、何なにいうてゐやはります。なぞと誠
 におとなしい夫故それゆゑ押おされる憂うれひはございませぬ、けれども軒のきの下したにはギツシリ爪つめも立た
 んほど立つて居をります。

其そのの中うちに追おひくお通とほりになります、向そうに列ならんで居をりますは、近衛兵このゑへいと申まうす事ことでござ
 いますが、私わたしどもには解わかりませんが、兵隊へいたいさんが整列せいれつして居をります。指図さしづ役やくのお
 方かたでございませうか、馬乗ばじやうで令れいを下くだして居をられます。四ツ辻つちとの処ところに点つつて居をりました電
 気燈とうが、段々だん々あか明るくなつて来ると、従したがつて日は西かたむに傾かたむきましたやうでございませう。
 其その中うちに又また拍子木ひやうしぎを、二ツ打ち三ツ打ち四ツ打ちつやうになつて来ると、四ツ辻つじの樂隊がくたい
 が喇叭らつぱに連つれて段々だん々きこ近く聞きこえます。兵士へいしの軍樂ぐんがくを奏そうしますのは勇いさましいものでござ
 いますが、此この時ときは陰々いん々くとして居をりまして、靴くつの音おともしないやうにお歩行あるきなさる事ことで、
 是これはどうも歩行あるき悪い事にくで、誠に静しづまり返かへつて兵士へいしばかりでは無い馬うままでも静しづかにしなけれ
 ばいかないと申まうす処ところが、馬うまは畜生ちくしやうの事ことで誠に心こころない物ものでございませうから、焦しれつたがり、
 駈出かけだしたり或あるは跡足あとあしでバタ／＼やるやうな事こともございませう。其そのの中うちにどうも兵士へいしの通
 る事は千人せんだか数限かずかぎりなく、又音楽またおんがくが聞きこえますると松火たいまつを点つけて参まゐりますが、松たいまつ

火をモウ些欲しいと存じましたが、どうもトップリ日が暮れて来る、電気は四ツ角に点いて居りますのだから幽かに此方へ映りまする、松火は所々にあるのでございますからハツキリとは見えませんが、何でも旗が二十本ばかり参つたと思ひました。皆白錦の御旗でございます。劍の様なものも幾らも参りました。其の中に御車を曳出して参りまするを見ますると、皆京都の人は柏手を打ちながら涙を翻して居りました。処へ風を冒いた人が常磐津を語るやうな声でオー〜といひますから、何だかと思つて側の人に聞きましたら、彼れは泣車といつて御車の軌る音だ、と仰しやいましたが、随分陰気な物でございます。其御車に四頭の牛がついて居ります。此牛は蓮華班といひ替牛が位牌班といふのがあり、天簾といふ牛がある。どうも能くさういふ毛並の牛が出来たものでございますが、牛飼さんに尋ねると然ういふ牛は其の時に生れて出ると云ひました、と京都の人が申しました。御車の前に糞をするといかんといふので、黒胡麻を食べさせて糞の出ないやうにするといふ、牛も骨の折れる事でございます。毎日々々食べ附けない黒胡麻を食べて糞詰りになるから牛が加減が悪くなつて、御所内の主殿寮に牛小屋がありまして、其の中に寝て居りますと、牛の仲間が見舞に参りました、といふお話しを考へました、是は昔風の獣物が口を利くといふお話の筋でございます。

多くの黒牛と白牛が這入て来まして、「御免なさい。「ハイ。「扨誠にどうもモウ
 このたびは御苦勞様のことです。誠に何うも云ひやうのない貴方は冥加至極のお
 身の上でげすな。「へエ有難うございます。「マア斯ういふ事は滅多にない事でござい
 ます、我々のやうな牛は実に骨の折れる事一通りではありません、女牛の乳を絞られ
 る時の痛さといふのは耐りません、夫にまア私どもの小牛等は腹の毛をむしられて、
 やへたて八重縦十文字に疵を付けられて、種痘瘡をされ布で巻かれて、其の痒い事は一通りでは
 ありません、夫れに私共は先年戦争の時などは、支那の恐ろしい道の悪い処へ行きま
 して木石を積んで運びますが、中々骨の折れた事で容易ではございません、勿論牛
 は力のあるのが性質故、詰りは国の為めだから仕方がございませんが、それに引換へ
 て貴方は結構でございますねエ。「へエ。「同じ牛でもどうも、五位の位が附いたとい
 ふ事を聞きましたが大したでございますか。「へエ……そんなに賞めてお呉んなさるな、
 畜生の身の上で位など貰ひましたから、果報焼けで、此様な塩梅に身体が悪くな
 つて、牛のくらの倒れとは此事で、毎日々々黒胡麻ばかり食はせられて、食べ附ない旨
 い物だからつい食べ過ぎてすつかり通じが留りましたので、逆せて目が悪くなつて、誠に
 どうも向うが見えませんかから狭い通りへ行つて、拝観人の中へでも曳き込むやうな事

があつて、怪我でもさせると大變だと思つて今から心配でございませう、モウ明 日に
 なりました……夫に私の名が貴方、どうも蓮華班といふのでげすからな、おまけに夢の
 浮橋を渡るといふので替牛がお前さん、位牌班といふので名が一体に訝しうござい
 ます、私もモウ明 日に役に立てば宜うございませう、今 晩にもヒヨツと生者必滅
 でございませう……。「然んな氣の弱い事をいつちやア行けません、お加減が悪ければ、
 明 日は御大役の事ですから早く牛の角文字にでも見せたら宜しうございませう……。
 牛の角文字といふのは、隠し題の歌に「二ツ文字牛の角文字直な文字ゆがみ文字とぞ君は
 覚ゆれ」是は恋しくといふ隠し題の歌で、二ツ文字はこの字で、牛の角文字は、いろはの
 いの字、直な文字はしの字で、ゆがみ文字はくの字でございませう、夫れですから牛の角文
 字といふのは貴方医をお頼みになつたら何うでございませうといふので。「夫は僕も家畜
 病院長を呼んで診察をして貰ひましたがな……。「お熱は何んな塩梅でございま
 すか。「熱は京都へ来たせいか平をんでげす。「熱度はどの位で。「三条七条と申す
 成ほど、夫ぢやア、マア大したお熱ぢやアないお脈の方は。「脈の方がどうございませう、
 九条から一条二条に出越す位な事です。「成ほど、脈の方がどうございませう、脈の割にす
 ると熱が陰にこもつて居りますな。「モウ、私は逆も助かるまいと思ひませう。「然んな事

を仰しやつちやアいけませんよ、どうか確しつかりなさい。「熱ねつがモウ少し浮うかないでは直り
ますまいよ。「御心配なさいますな、明みやう日にちはキツと御発カんでございます。

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

※表題は底本では、「牛車《うしぐるま》」となっています。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年7月19日作成

2014年5月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

牛車

三遊亭円朝

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>